

思
考
の
隅
景

文部科学省科学研究費補助金特定領域研究の一環で、三重大学を舞台に開催された「江戸のモノづくり」第4回国際シンポジウム

(6月12日)では、ルーヴァン・カトリック大学のウィリー・ファンデ・ワラ、浙江大学の王宝平両教授が招待講演をなさり、ボソ大学のヨーゼフ・クライナー教授が討論を司会された。

一行は、翌日、講演とも密接に結び付いた現地を探索した。津市の城跡ほど近くには斎藤拙堂(1797-1865)の記念館がある。頼山陽に師事したこの儒者は、大塩平八郎や吉田松陰とも交友があり、月瀬梅林の名を全国に広めた(大室幹雄『月瀬幻影』)。その『月瀬記勝』は戦前の師範学校の漢文の教科書に掲載され、和製漢文のお手本として小中学校教員たちが暗唱した名文。もう少し南の鳥羽藩射和村には、伊勢商人、竹川竹斎(1809-1882)という人物もいて、親類のほか、知人である勝海舟、大久保一翁、辞書で有名なヘボンなどからの寄贈を得て、一万五千冊におよぶ蔵書をなし、幕末期より一般に公開していたことが、知られている。明治の維新になると、竹斎はその蔵書を新設の学校に寄付しようと申し出るが、渡会県はこれを旧代の反故と見なして、売却のうえ現金にて上納せよと命じ、この蔵書はあえなく消滅。「数十年の苦心、一滴の血涙に帰す」との言葉が残る。浅井政弘・上野利三編『竹斎日記稿』(松坂大学地域社会研究所)が編集・発行されている。

そうしたなか、とりわけ興味深いのが、野呂元文(1693-1761)の里。勢和村

徳川日本の地域の活力と
海外への眼差し

「江戸のモノづくり」国際シンポジウムより・下

2689
2004
8-2

国際日本文化研究センター研究員・
総合研究大学院大学助教授
稲賀繁美

のふるさと交流館では、6月11日から3日間、特別展が開催され、残された関連書簡の翻刻を含む『野呂元文関係歴史資料目録』(勢和村教育委員会)が頒布された。青木昆陽とともに、將軍吉宗の命をうけ、本草学に先鞭をつけたとされる、本邦蘭学の草分けのひとりだが、その生家が波多瀬村に残っていて、菩提寺に至る里山には、記念館とともに見事な薬草園が管理されている。もっとも吉宗の命による蘭学興隆という物語は、『蘭学事始』の杉田玄白による脚色の疑いも捨て切れず、元文自らが晩年に残した自叙伝には、直接の言及は見られない。とはいえ通称ヨンストンの『動物図譜』翻訳に続き、ドドネウス『阿蘭陀本草和解』を訳出した功績は看過できない。

台風一過の好天に恵まれた野呂元文の里は、四方を山に囲まれ、水田を過ぎる涼風に青々とした稲が緩やかに波打ち、畦道に咲き誇る紫陽花が目にも沁みだ。徳川時代の日本には、隠れ里よろしく、各地の里山に、こうした桃源郷のような空間が開けていた。蘭学艦船の揺籃ともなった山村の風光に接して、地域と地球との接点を探り直した一日の体験だった。

*なお第5回シンポジウム「文明交流史からみた科学と宗教」は7月11日、京都大学人間・環境学研究科棟地下大講義室B23にて行われた。問い合わせは電話/ファックス075-6753-6718/E-mail: o51340@sakura.kudpc.kyoto-u.ac.jp 第4回講演会では地元参加者の少ないのが残念だった。